

## 鹿踊りのはじまり

そのとき西 [にし] のぎらぎらのちぢれた雲 [くも] のあひだから、夕陽 [ゆふひ] は赤 [あか] くなゝめに苔 [こけ] の野原 [のほら] に注 [そゝ] ぎ、すすきはみんな白 [しろ] い火 [ひ] のやうにゆれて光 [ひか] りました。わたくしが疲 [つか] れてそこに睡 [ねむ] りますと、ざあざあ吹 [ふ] いてゐた風 [かぜ] が、だんだん人 [ひと] のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上 [きたかみ] の山 [やま] の方 [ほう] や、野原 [のほら] に行 [おこな] はれてゐた鹿踊 [しゝおどり] りの、ほんたうの精神 [せいしん] を語 [かた] りました

そこらがまだまるつきり、丈高 [たけたか] い草 [くさ] や黒 [くろ] い林 [はやし] のままだつたとき、嘉十 [かじふ] はおぢいさんたちと北上川 [きたかみがは] の東 [ひがし] から移 [うつ] つてきて、小 [ちい] さな畑 [はたけ] を開 [ひら] いて、粟 [あは] や稗 [ひえ] をつくつてゐました。

あるとき嘉十 [かじふ] は、栗 [くり] の木 [き] から落 [お] ちて、少 [すこ] し左

〔ひだり〕の膝〔ひざ〕を悪〔わる〕くしました。そんなときみんなはいつでも、西〔にし〕の山〔やま〕の中〔なか〕の湯〔ゆ〕の湧〔わ〕くところへ行〔い〕つて、小屋〔こや〕をかけて泊〔とま〕つて療〔なほ〕すのでした。

天気〔てんき〕のいゝ日〔ひ〕に、嘉十〔かじふ〕も出〔で〕かけて行〔い〕きました。糧〔かて〕と味噌〔みそ〕と鍋〔なべ〕とをしょつて、もう銀〔ぎん〕いろの穂〔ほ〕を出〔だ〕したすすきの野原〔のはら〕をすこしびつこをひきながら、ゆつくりゆつくり歩〔ある〕いて行〔い〕つたのです。

いくつもの小流〔こなが〕れや石原〔いしはら〕を越〔こ〕えて、山脈〔さんみやく〕のかたちも大〔おほ〕きくはつきりなり、山〔やま〕の木〔き〕も一本一本〔いつぽんいつぽん〕、すぎごけのやうに見〔み〕わけられるところまで来〔き〕たときは、太陽〔たいやう〕はもうよほど西〔にし〕に外〔そ〕れて、十本〔じつぽん〕ばかりの青〔あを〕いはんのきの木立〔こだち〕の上〔うへ〕に、少〔すこ〕し青〔あを〕ざめてぎらぎら光〔ひか〕つてかかりました。

嘉十〔かじふ〕は芝草〔しばくさ〕の上〔うへ〕に、せなかの荷物〔にもつ〕をどつかりおろして、栃〔とち〕と栗〔あわ〕とのだんごを出〔だ〕して喰〔た〕べはじめました。

すすきは幾 [いく] むらも幾 [いく] むらも、はては野原 [のはら] いつぱいのやうに、まつ白 [しろ] に光 [ひか] つて波 [なみ] をたてました。嘉十 [かじふ] はだんごをたべながら、すすきの中 [なか] から黒 [くろ] くまつすぐに立 [た] つてゐる、はんのきの幹 [みき] をじつにりつばだとおもひました。

ところがあんまり一生 [いつしやう] けん命 [めい] あるいたあとは、どうもなんだかお腹 [なか] がいつぱいのやうな気 [き] がするのです。そこで嘉十 [かじふ] も、おしまひに栃 [とち] の団子 [だんご] をとちの実 [み] のくらゐ残 [のこ] しました。

「こいづば鹿 [しか] さ呉 [け] でやべか。それ、鹿 [しか]、来 [き] て喰 [け]」と嘉十 [かじふ] はひとりごとのやうに言 [い] つて、それをうめばちさうの白 [しろ] い花 [はな] の下 [した] に置 [お] きました。それから荷物 [にもつ] をまたしよつて、ゆつくりゆつくり歩 [ある] きだしました。

ところが少 [すこ] し行 [い] つたとき、嘉十 [かじふ] はさつきのやすんだところに、手拭 [てぬぐひ] を忘 [わす] れて来 [き] たのに気 [き] がつきましたので、急 [いそ] いでまた引 [ひ] つ返 [かへ] しました。あのはんのきの黒 [くろ] い木立 [こだち] がちき近 [ちか] くに見 [み] えてゐて、そこまで戻 [もど] るぐらゐ、なんの事 [こと]

でもないやうでした。

けれども嘉十 [かじふ] はぴたりとたちどまつてしまひました。

それはたしかに鹿 [しか] のけはひがしたのです。

鹿 [しか] が少 [すくな] くても五六疋 [びき]、湿 [しめ] つぼいはなづらをずうつと延 [の] ばして、しづかに歩 [ある] いてゐるらしいのでした。

嘉十 [かじふ] はすすきに触 [ふ] れないやうに気 [き] を付 [つ] けながら、爪立 [つままだ] てをして、そつと苔 [こけ] を踏 [ふ] んでそつちの方 [ほう] へ行 [い] きました。

たしかに鹿 [しか] はさつきの栃 [とち] の団子 [だんご] にやつてきたのでした。

「はあ、鹿等 [しかだ] あ、すぐに来 [き] たもな。」と嘉十 [かじふ] は咽喉 [のど] の中 [なか] で、笑 [わら] ひながらつぶやきました。そしてからだをかゞめて、そろりそろりと、そつちに近 [ちか] よつて行 [ゆ] きました。

一むらのすすきの陰 [かげ] から、嘉十 [かじふ] はちよつと顔 [かほ] をだして、びつくりしてまたひつ込 [こ] めました。六疋 [びき] ばかりの鹿 [しか] がさつきの芝原 [しばはら] を、ぐるぐるぐるぐる環 [わ] になつて廻 [まは] つてゐるのでした。嘉十

〔かじふ〕はすすきの隙間〔すきま〕から、息〔いき〕をこらしてのぞきました。

太陽〔たいやう〕が、ぢやうど一本〔いつぽん〕のはんのさの頂〔いたゞき〕にかかつてゐましたので、その梢〔こずゑ〕はあやしく青〔あを〕くひかり、まるで鹿〔しか〕の群〔むれ〕を見〔み〕おろしてぢつと立〔た〕つてゐる青〔あを〕いいきものやうにおもはれました。すすきの穂〔ほ〕も、一本〔いつぽん〕づつ銀〔ぎん〕いろにかがやき、鹿〔しか〕の毛並〔けなみ〕がことにその日〔ひ〕はりつぱでした。

嘉十〔かじふ〕はよろこんで、そつと片膝〔かたひざ〕をついてそれに見〔み〕とれました。

鹿〔しか〕は大〔おほ〕きな環〔わ〕をつくつて、ぐるぐるぐるぐる廻〔まは〕つてゐましたが、よく見〔み〕るとどの鹿〔しか〕も環〔わ〕のまんなかの方〔ほう〕に気〔き〕がとられてゐるやうでした。その証拠〔しとうこ〕には、頭〔あたま〕も耳〔みみ〕も眼〔め〕もみんなそつちへ向〔む〕いて、おまけにたびたび、いかにも引〔ひ〕つぱられるやうに、よろよろと二足三足〔ふたあしみあし〕、環〔わ〕からはなれてそつちへ寄〔よ〕つて行〔ゆ〕きさうにするのでした。

もちろん、その環〔わ〕のまんなかには、さつきの嘉十〔かじふ〕の栃〔とち〕の団子

「だんご」がひとかけ置「お」いてあつたのですが、鹿「しか」どものしきりに気「き」にかけてゐるのは決「けつ」して団子「だんご」ではなくて、そのとなりの草「くさ」の上「うへ」にくの字「じ」になつて落「お」ちてゐる、嘉十「かじふ」の白「しろ」い手拭「てぬぐひ」らしいのでした。嘉十「かじふ」は痛「いた」い足「あし」をそつと手「て」で曲「ま」げて、苔「こけ」の上「うへ」にきちんと座「すは」りました

鹿「しか」のめぐりはだんだんゆるやかになり、みんなは交「かは」る交「がは」る、前肢「まへあし」を一本「いつぽん」環「わ」の中「なか」の方「ほう」へ出「だ」して、今「いま」にもかけ出「だ」して行「い」きさうにしては、びつくりしたやうにまた引「ひ」つ込「こ」めて、とつとつとつとつしづかに走「はし」るのでした。その足音「あしおと」は気「き」もちよく野原「のはら」の黒土「くろつち」の底「そこ」の方「ほう」までひゞきました。それから鹿「しか」どもはまはるのをやめてみんな手拭「てぬぐひ」のこちらの方「ほう」に来「き」て立「た」ちました。

嘉十「かじふ」はにはかに耳「みみ」がきいんと鳴「な」りました。そしてがたがたふるえました。鹿「しか」どもの風「かぜ」にゆれる草穂「くさほ」のやうな気「き」もちが、波「なみ」になつて伝「つた」はつて来「き」たのでした。

嘉十 [かじふ] はほんたうにじぶんの耳 [みゝ] を疑 [うたが] ひました。それは鹿 [しか] のことばがきこえてきたからです。

「ぢや、おれ行 [い] つて見 [み] で来 [こ] べが。」

「うんにや、危 [あぶ] ないじや。も少 [すこ] し見 [み] でべ。」

こんなことばもきこえました。

「何時 [いつ] だかの狐 [きつね] みだいに口発破 [くちはつぱ] などさ罹 [かゝ] つてあ、つまらないもな、高 [たか] で栃 [とち] の団子 [だんご] などだよ。」

「そだそだ、全 [まつた] ぐだ。」

こんなことばも聞 [き] きました。

「生 [い] ぎものだかも知 [し] れないじやい。」

「うん。生 [い] ぎものらしどごもあるな。」

こんなことばも聞 [きこ] えました。そのうちにたうたう一疋 [びき] が、いかにも決心 [けつしん] したらしく、せなかをまつすぐにして環 [わ] からはなれて、まんなかの方 [ほう] に進 [すす] み出 [で] ました

みんなは停 [とま] つてそれを見 [み] てゐます。

進 [すゝ] んで行 [い] つた鹿 [しか] は、首 [くび] をあらんかぎり延 [の] ばし、四本 [しほん] の脚 [あし] を引 [ひ] きしめ引 [ひ] きしめそろりそろりと手拭 [てぬぐひ] に近 [ちか] づいて行 [い] きましたが、俄 [には] かにひどく飛 [と] びあがって、一目散 [もくさん] に遁 [に] げ戻 [もど] ってきました。廻 [まは] りの五疋 [ひき] も一ぺんにぱつと四方 [しほう] へちらけやうとしましたが、はじめの鹿 [しか] が、ぴたりととまりましたのでやつと安心 [あんしん] して、のそのそ戻 [もど] ったその鹿 [しか] の前 [まへ] に集 [あつ] まりました。

「なぢよだた。なにだた、あの白 [しろ] い長 [なが] いやづあ。」

「縦 [たて] に皺 [しは] の寄 [よ] つたもんだけあな。」

「そだら生 [い] ぎものだないがべ、やつぱり蕈 [きのこ] などだべが。毒蕈 [ぶすきのこ] だべ。」

「うんにや。きのごだない。やつぱり生 [い] ぎものらし。」

「さうが。生 [い] ぎもので皺 [しわ] うんと寄 [よ] つてらば、年老 [としよ] りだな。」

「うん年老 [としよ] りの番兵 [ばんぺい] だ。ううはははは。」

「ふふふ青白 [あをじろ] の番兵 [ばんぺい] だ。」



「ううははは、青 [あを] じろ番兵 [ばんべい] だ。」

「こんどおれ行 [い] つて見 [み] べが。」

「行 [い] つてみろ、大丈夫 [だいじやうぶ] だ。」

「喰 [く] つつがないが。」

「うんにや、大丈夫 [だいじやうぶ] だ。」

そこでまた一疋 [びき] が、そろりそろりと進 [すす] んで行きました。五疋 [ひき] はこちらで、ことりことりとあたまを振 [ふ] つてそれを見 [み] てゐました。

進 [すす] んで行 [い] つた一疋 [びき] は、たびたびもうこわくて、たまらないといふやうに、四本 [ほん] の脚 [あし] を集 [あつ] めてせなかを円 [まる] くしたりそつとまたのぼしたりして、そろりそろりと進 [すす] みました。

そしてたうたう手拭 [てぬぐひ] のひと足 [あし] こつちまで行 [い] つて、あらんかぎり首 [くび] を延 [の] ばしてふんふん鼻 [か] いでゐましたが、俄 [には] かにはねあがつて遁 [に] げてきました。みんなもびくつとして一ぺんに遁 [に] げださうとしましたが、その一びきがぴたりと停 [と] まりましたのでやつと安心 [あんしん] して五つの頭 [あたま] をその一つの頭 [あたま] に集 [あつ] めました。

「なぢよだた、なして逃 [に] げで来 [き] た。」

「囁 [か] ちるべとしたやうだたもさ。」

「ぜんたいなにだけあ。」

「わがらないな。とにかぐ白 [しろ] どそれがら青 [あを] ど、両方 [りやうほう] のぶぢだ。」

「匂 [にほひ] あなぢよだ、匂 [にほひ] あ。」

「柳 [やなぎ] の葉 [は] みだいな匂 [にほひ] だな。」

「はでな、息吐 [いぎつ] であるが、息 [いぎ]。」

「さあ、そでは、気付 [きつ] けないがた。」

「こんどあ、おれあ行 [い] つて見 [み] べが。」

「行 [い] つてみろ」

三番目 [ばんめ] の鹿 [しか] がまたそろりそろりと進 [すす] みました。そのときちよつと風 [かぜ] が吹 [ふ] いて手拭 [てぬぐひ] がちらつと動 [うご] きましたので、その進 [すす] んで行 [い] つた鹿 [しか] はびつくりして立 [た] ちどまつてしまひ、こつちのみんなもびくつとしました。けれども鹿 [しか] はやつとまた気 [き] を落 [お]

ちついたらしく、またそろりそろりと進 [すゝ] んで、たうたう手拭 [てぬぐひ] まで鼻 [はな] さきを延 [の] ばした。

こつちでは五疋 [ひき] がみんなことりことりとお互 [たがひ] にうなづき合 [あ] つて居 [を] りました。そのとき俄 [には] かに進 [すゝ] んで行 [い] った鹿 [しか] が竿立 [さをだ] ちになつて躍 [をど] りあがつて遁 [に] げてきました

「何 [な] して遁 [に] げできた。」

「気味悪 [きびわり] くなてよ。」

「息吐 [いぎつ] であるが。」

「さあ、息 [いぎ] の音 [おど] あ為 [さ] ないがけあな。口 [くち] も無 [な] いやうだけあな。」

「あだまあるが。」

「あだまもゆぐわがらないがつたな。」

「そだらこんだおれ行 [い] つて見 [み] べが。」

四番目 [よばんめ] の鹿 [しか] が出 [で] て行 [い] きました。これもやつぱりびくびくものです。それでもすつかり手拭 [てぬぐひ] の前 [まへ] まで行 [い] つて、いかに

も思 [おも] ひ切 [き] つたらしく、ちよつと鼻 [はな] を手拭 [てぬぐひ] に押 [お] しつけて、それから急 [いそ] いで引 [ひ] つ込 [こ] めて、一目 [いちもん] さんに帰 [かへ] つてきました。

「おう、柔 [や] つけもんだぞ。」

「泥 [どろ] のやうにが。」

「うんにや。」

「草 [くさ] のやうにが。」

「うんにや。」

「ごさざい [ゝゝゝゝ] の毛 [け] のやうにが。」

「うん、あれよりあ、も少 [すこ] し硬 [こわ] ばしな。」

「なにだべ。」

「とにかぐ生 [い] ぎもんだ。」

「やつぱりさうだが。」

「うん、汗臭 [あせくさ] いも。」

「おれも一遍行 [ひとがへりい] つてみべが。」

五番目 [ばんめ] の鹿 [しか] がまたそろりそろりと進 [すゝ] んで行 [い] きました。この鹿 [しか] はよほどおどけもののやうでした。手拭 [てぬぐひ] の上 [うへ] にすっかり頭 [あたま] をさげて、それからいかにも不審 [ふしん] だといふやうに、頭 [あたま] をかくつと動 [うご] かしませんでしたので、こつちの五疋 [ひき] がはねあがつて笑 [わら] ひました。

向 [むか] ふの一疋 [びき] はそこで得意 [とくい] になつて、舌 [した] を出 [だ] して手拭 [てぬぐひ] を一つべろりと嘗 [な] めましたが、にはかに怖 [こは] くなつたとみえて、大 [おほ] きく口 [くち] をあけて舌 [した] をぶらさげて、まるで風 [かせ] のやうに飛 [と] んで帰 [かへ] ってきました。みんなもひどく愕 [おど] ろきました。

「ぢや、ぢや、嚙 [か] ちらへだが、痛 [いた] ぐしたが。」

「プルルルルル。」

「舌抜 [したぬ] がれだが。」

「プルルルルル。」

「なにした、なにした。なにした。ぢや。」

「ふう、あゝ、舌縮 [したちぢ] まつてしまつたよ。」

「なじよな味 [あじ] だた。」

「味無 [あじな] いがたな。」

「生 [い] ぎもんだべが。」

「なじよだが判 [わか] らない。こんどあ汝 [うな] あ行 [い] つてみろ。」

「お。」

おしまひの一疋 [びき] がまたそろそろ出 [で] て行 [い] きました。みんながおもしろさうに、ことごと頭 [あたま] を振 [ふ] つて見 [み] てゐますと、進 [すす] んで行 [い] つた一疋 [びき] は、しばらく首 [くび] をさげて手拭 [てぬぐひ] を嗅 [か] いでゐましたが、もう心配 [しんぱい] もなにもないといふ風 [ふう] で、いきなりそれをくわいて戻 [もど] つてきました。そこで鹿 [しか] はみなぴよんぴよん跳 [と] びあがりました。

「おう、うまい、うまい、そいづさい取 [と] つてしめば、あどは何 [なん] つても怖 [お] つかなくない。

「きつともて、こいづあ大きな蝸牛 [なめくづら] の早 [ひ] からびだのだな。」

「さあ、いゝが、おれ歌 [うた] うだらはんてみんな廻 [ま] れ。」

その鹿[しか]はみんなのなかにはいつてうたひだし、みんなはぐるぐるぐるぐる手拭[てぬぐひ]をまはりはじめました。

「のはらのまん中[なか]の	めつけもの
すつこんすつこの	栃[とち]だんご
栃[とち]のだんごは	結構[けつこう]だが
となりにいからだ	ふんながす
青あをじろ番兵[ばんぺ]は	気[き]にかがる。
青あをじろ番兵[ばんぺ]は	ふんにやふにや
吠[ほ]えるもさないば	泣[な]ぐもさない
瘡[や]せで長[なが]くて	ぶちぶちで
どごが口[くち]だが	あだまだが
ひでりあがりの	なめぐちら。」

走[はし]りながら廻[まは]りながら踊[おど]りながら、鹿[しか]はたびたび風[かぜ]のやうに進[すす]んで、手拭[てぬぐひ]を角[つの]でついたり足[あし]でふんだりしました。嘉十[かじふ]の手拭[てぬぐひ]はかあいさうに泥[どろ]がつ

いてところどころ穴 [あな] さへあきました。

そこで鹿 [しか] のめぐりはだんだんゆるやかになりました。

「おう、こんだ団子 [だんご] お食 [く] ばがりだちよ。」

「おう、煮 [に] だ団子だちよ。」

「おう、まん円 [まる] けちよ。」

「おう、はんぐはぐ。」

「おう、すつこんすつこ。」

「おう、けつこ。」

鹿 [しか] はそれからみんなばらばらになつて、四方 [しほう] から栃 [とち] のだんでを囲 [かこ] んで集 [あつ] まりました。

そしていちばんはじめに手拭 [てぬぐひ] に進 [すす] んだ鹿 [しか] から、一口 [ひとくち] づつ団子 [だんご] をたべました。六疋 [びき] めの鹿 [しか] は、やつと豆粒 [まめつぶ] くらゐをたべただけです。

鹿 [しか] はそれからまた環 [わ] になつて、ぐるぐるぐるぐるめぐりあるきました。

嘉十 [かじふ] はもうあんまりよく鹿 [しか] を見 [み] ましたので、じぶんまでが鹿



〔しか〕のやうな氣〔き〕がして、いまにもとび出〔だ〕さうとしましたが、じぶんの大  
〔おほ〕きな手〔て〕がすぐ眼〔め〕にはいりましたので、やつぱりだめだとおもひなが  
らまた息〔いき〕をこらしました。

太陽〔たいやう〕はこのとき、ちやうどはんのきの梢〔こずゑ〕の中〔なか〕ほどにか  
かつて、少〔すこ〕し黄〔き〕いろにかゞやいて居〔を〕りました。鹿〔しか〕のめぐり  
はまただんだんゆるやかになつて、たがひにせわしくうなづき合〔あ〕ひ、やがて一列〔れ  
つ〕に太陽〔たいやう〕に向〔む〕いて、それを拝〔おが〕むやうにしてまつすぐに立〔た〕  
つたのでした。嘉十〔かじふ〕はもうほんたうに夢〔ゆめ〕のやうにそれに見〔み〕とれ  
てゐたのです。

一ばん右〔みぎ〕はじにたつた鹿〔しか〕が細〔ほそ〕い声〔こゑ〕でうたひました。

「はんの木〔ぎ〕の

みどりみぢんの葉〔は〕の向〔もご〕さ

ぢやらんぢやらんの

お日〔ひ〕さん懸〔か〕がる。」

その水晶〔すゐしやう〕の笛〔ふえ〕のやうな声〔こゑ〕に、嘉十〔かじふ〕は目〔め〕

をつぶつてふるえあがりました。右〔みぎ〕から二ばん目〔め〕の鹿〔しか〕が、俄〔には〕かにとびあがつて、それからからだを波〔なみ〕のやうにうねらせながら、みんなの間〔あひだ〕を縫〔ぬ〕つてはせまはり、たびたび太陽〔たいやう〕の方〔ほう〕にあたまをさげました。それからじぶんのところに戻〔もど〕るやぴたりととまつてうたひました。

「お日〔ひ〕さんを  
せながさしよへば、はんの木〔ぎ〕も  
くだけで光〔ひか〕る  
鉄〔てつ〕のかんがみ。」

はあと嘉十〔かじふ〕もこつちでその立派〔りつぱ〕な太陽〔たいやう〕とはんのきを拜〔おが〕みました。右〔みぎ〕から三ばん目〔め〕の鹿〔しか〕は首〔くび〕をせはしくあげたり下〔さ〕げたりしてうたひました。

「お日〔ひ〕さんは  
はんの木〔ぎ〕の向〔もご〕き、降〔お〕りでも  
すすぎ、ぎんがぎが

まぶしまんぶし。」

ほんたうにすすきはみんな、まつ白〔しろ〕な火〔ひ〕のやうに燃〔も〕えたのです。

「ぎんがぎがの

すすぎの中〔なが〕さ立〔た〕ちあがる

はんの木〔ぎ〕のすねの

長〔な〕んがい、かげぼうし。」

五番目〔ばんめ〕の鹿〔しか〕がひくく首〔くび〕を垂〔た〕れて、もうつぶやくやう  
にうたひだしてゐました

「ぎんがぎがの

すすぎの底〔そこ〕の日暮〔ひぐ〕れかだ

苔〔こけ〕の野〔の〕はらを

蟻〔あり〕ても行〔い〕がず。」

このとき鹿〔しか〕はみな首〔くび〕を垂〔た〕れてゐましたが、六番目〔ばんめ〕が  
にはかに首〔くび〕をりんとあげてうたひました。

「ぎんがぎがの

すすぎの底 [そご] でそつこりと

咲 [さ] ぐうめばちの

愛 [え] どしおえどし。」

鹿 [しか] はそれからみんな、みぢかく笛 [ふゑ] のやうに鳴 [な] いてはねあがり、はげしくはげしくまはりました。

北 [きた] から冷 [つめ] たい風 [かぜ] が来 [き] て、ひゆうと鳴 [な] り、ほんの木 [き] はほんたうに砕 [くだ] けた鉄 [てつ] の鏡 [かゞみ] のやうにかゞやき、かちんかちんと葉 [は] と葉 [は] がすれあつて音 [おと] をたてたやうにさへおもはれ、すすぎの穂 [ほ] までが鹿 [しか] にまぢつて一しよにぐるぐるめぐつてゐるやうに見 [み] えました。

嘉十 [かじふ] はもうまつたくじぶんと鹿 [しか] とのちがひを忘 [わす] れて、「ホウ、やれ、やれい。」と叫 [さけ] びながらすすぎのかけから飛 [と] び出 [ば] しました。

鹿 [しか] はおどろいて一度 [いちど] に竿 [さを] のやうに立 [た] ちあがり、それからはやてに吹 [ふ] かれた木 [き] の葉 [は] のやうに、からだを斜 [なゝ] めにして

逃 [に] げ出 [だ] しました。銀 [ぎん] のすすきの波 [なみ] をわけ、かゞやく夕陽 [ゆふひ] の流 [なが] れをみだしてはるかにはるかに遁 [に] げて行 [い] き、そのとほつたあとのすすきは静 [しづ] かな湖 [みづうみ] の水脈 [みを] のやうにいつまでもぎらぎら光 [ひか] っ居 [を] りました

そこで嘉十 [かじふ] はちよつとにが笑 [わら] ひをしながら、泥 [どろ] のついて穴 [あな] のあいた手拭 [てぬぐひ] をひろつてじぶんもまた西 [にし] の方 [ほう] へ歩 [ある] きはじめたのです。

それから、さうさう、苔 [こけ] の野原 [のはら] の夕陽 [ゆふひ] の中 [なか] で、わたくしはこのはなしをすすきとほつた秋 [あき] の風 [かぜ] から聞 [き] いたのです。

■このファイルについて

標題：鹿踊りのはじまり

著者：宮澤賢治

本文：「注文の多い料理店」

発行：大正十三年十二月一日

販売元：杜陵出版部／東京光原社

新選 名著復刻全集 近代文学館 昭和51年4月1日 発行  
(第14刷)

表記：原文の表記を尊重しつつ、以下のように扱います。

○誤字・脱字等は、訂正せず底本通りとしました。

○本文のかなづかいは、底本通りとしました。

○旧字体は、現行の新字体に替えました。ただし、新字体に替えなかった漢字もあります。

新字体がない場合は、旧字体をそのまま用いました。

○繰り返し記号／＼は用いず、同語反復としました。

入力：今井安貴夫

ファイル作成：里実工房

公開：里実文庫 2006年1月2日